



TITLE:

シュンペーターの景気変動理論

AUTHOR(S):

永友, 育雄

CITATION:

永友, 育雄. シュンペーターの景気変動理論. 経済論叢 1960, 86(4): 269-283

ISSUE DATE:

1960-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/132784>

RIGHT:

經濟論叢

第八十六卷 第四號

ブルック・ファーム……………穂 積 文 雄 1

社会主義国における国際価値論……………鈴木 重 靖 16

対外関係よりみた元明兩朝の比較……………伊 藤 幸 一 33

シュンペーターの景気変動理論……………永 友 育 雄 43

昭和三十五年十月

京都大學經濟學會

シュンペーターの景気変動理論

永友育雄

一 問 題

一 故ヨーゼフ・シュンペーター教授（一八八三—一九五〇年）は一九三九年に彼の景気変動分析の全貌を「景気変動論」¹⁾（全二巻、*Business Cycles*, 2 vols, 1939）において提示した。それはその副題が示すように「資本主義過程の理論的歴史的統計的分析」である。小論はその理論的部分（「景気変動論」第二章—第四章）を中心にシュンペーターの景気変動分析について研究する。

二 ところでシュンペーターの景気変動論を対象にした研究は非常に多い。しかしその多くは個々の問題点（例えば、定常状態・零利子・企業者・革新・信用理論・コンドラチェフ波動等の個々の問題点）を取りあげたものであったり、又一元論か二元論かという方法論上の問題であったりするものが主である。そしてその対象も主として「理論経済学の本質と主要内容」

（一九〇八年）や「経済発展の理論」（一九二二年）である。小論はこれに対してシュンペーターの景気分析の完成したものである「景気変動論」をとりあげ、その理論的部分に関するものを体系的にとり扱おうと思う²⁾。そしてここで取り扱うような理解の仕方こそシュンペーターの社会科学体系全体の中での彼の景気変動論の地位を明らかにするという仕事の準備ともなり得るものであると思うのである³⁾。又最近問題になりつつあるものにシュンペーターの理論をその他の経済学の中に吸収しようとする気運があるが、これに対しても実は通説とは異なった方向にこそその豊かな可能性があるのではないかということがここで試みた理解の線に沿って考えられるのである⁴⁾。

(1) *Business Cycle* や *Trade Cycle* は普通「景気循環」と訳さなっている。しかし「循環」という言葉は他の意味（例えば *circulation* や *Kreislauf*）にも用いられることがあり混乱をまねくおそれもある。そこでここでは「循環」

という用語をさけて「變動」という用語を用いることにした。

- (2) クレメンズとドーディはシュンペーターの「景氣變動論」の理論的部分を全面的にとりあげている。しかしそこには小論において試みようとする体系的理解の意図はうかがわれない。Clemence and Doody, *The Schumpeterian System*, 1950. 伊達邦春監訳「シュンペーター經濟學入門」昭和三十一年。
- (3) この問題のたち入った研究は別の機会にゆずる。
- (4) この主張の積極的展開は別の機会にゆずる。

二 シュンペーターの景氣變動理論

1 分析の視野

一 「資本主義過程の理論的・歴史的統計的分析」という問題こそは真にシュンペーターの意図と視野とを示している。單に所謂景氣變動といわれる狭い視野ではなくして資本主義の經濟過程そのものを全体として把握しようというのである。小論ではこの広大な視野の中での理論的分析の部分のみを取扱う。

二 ここでシュンペーターの資本主義の定義をみておこう。

彼は云う、「資本主義とは、革新が借金によって遂行されるところの私有財産經濟の形態であり、その借金は、理論上必然的にではないが一般的には、信用創造を意味している」と。(「景

氣變動論」二二三頁。以下本文中の頁数はシュンペーターの「景氣變動論」のそれをさす)。この信用創造に依存して資本金を入手し、革新即ち新生產函數の設定によって經濟の發展をまきおこすのが企業者であり、そこに資本主義の經濟過程が展開するのである。古い生產函數が破壊され新しい生產函數が設定されるということは經濟的生產技術上の飛躍的な發展でありその意味で非連續的なものである。ここに彼の資本主義的經濟の發展は非連續的なものであるという見方が成立する。そしてその發展が變動を生み出すのであるから、「變動機構に關する我々の理論は非連續性を強調する」(二二六頁)と彼は云うのである。この言葉は彼の經濟發展論即ち景氣變動論の中心ともいふべき革新の理論の中核を如実に示すものであらう。

2 分析の構造

一 ではシュンペーターの景氣變動理論はどのような分析上の構造を持っているのであるか。

まず經濟發展をもたらす資本主義的な景氣變動をもたらす根本的な動因に關する議論がある。次に資本主義的經濟發展を媒介する貨幣機構の議論がある。そしてそれについて諸局面交替の理論即ち景氣變動の理論が展開されるのである。

二 このような分析上の構造は後にみるように彼の理論の展開の順序の中に明白にあらわれている。しかしまず發展が論ぜられる前に發展なき場合の經濟の姿が明らかにせられる必要が

ある。

3、定常状態

一 発展なき経済過程は「定常状態」・「循環の流れ」・「理論的正常」等と呼ばれる。

この定常状態は完全競争の場合に最も厳密に成立する。所謂ワルラス流の一般均衡である。ここでは経済は何の発展もなく所与の状況に完全に適応したまま毎期毎期全く同一の過程をくりかえしてゆくのである。

しかし、このようにして定常状態たる一般均衡の存在を認識するだけでは不十分である。発展の要因を除く限り、経済の世界にはこのような一般均衡に向わんとする力が作用していることを認識する事が重要である。時の遅れや粘着性や予想の要因が存在しても、発展の要因を除く限り、一般均衡は厳密には到達せられる事はなくとも、常にそれに近づこうとする均衡化のメカニズムは作用しているのである(一四八頁)。そして景気変動分析にとっては均衡値そのものよりもこの均衡化のメカニズムの方が重要なのである(六八頁・七〇―七二頁)。そして均衡値にあらざる「均衡の近傍」という概念があらわれ、均衡の外にあるというよりも均衡の内にあるという方がよりびつたりとしているような範囲を示すのに用いられるのである(七〇―七二頁)。

二 ここでは以上の定常状態の分析はシュンペーターの景気変

シュンペーターの景気変動理論

動論にとって二つの重大な意義をもつことを記さねばならぬ。

第一に発展の状態が生じて来る事情を最も根源的に示すには発展なき状態から発展の生起を示さねばならぬ。このために定常状態の一般均衡分析が示されたのである。第二に、重要なものは均衡値よりも均衡化のメカニズムであり、このメカニズムは景気変動過程においても働いているのであり、均衡理論はこのメカニズムを示すものである。

(1) この点では適応過程の理論として提示される変化法

(Variationsmethode)の議論は重要である。木村・安井訳

「シュンペーター理論経済学の本質と主要内容」一九〇八年(邦訳昭和十一年)第四部、参照。

4 発展の動因

一 定常状態に発展の動因が生じると経済は変動の過程に入り込む。しかし一般に経済変動には二種あって、一つは外生的原因によるものであり、他は内生的原因によるものである。外生的原因としては政治上の事件・自然的原因による豊凶作・金鉱の発見等々があるが、これは経済発展の特別の問題を提供せず、経済体系はこの変化に対して適応してゆくにとどまる。しかし内生的原因による経済変動は重要であり、前者と区別してこれを経済の発展とよび、又経済の自生的変動ともよんでいる(一四頁)。

二 内生的原因として彼は次の三つをあげる。

第八十六卷 一七二 第四号 四五

第一に消費者の嗜好の変化である。しかしこれは独立の要因として働くと考えすることは非現実的でありむしろ發展現象に伴われて生ずるものであつて、これを特に独立にとりあげることはしない（七三—七四頁）。

第二に生産要素の質や量の変化である。これも第一のものと同じく發展現象に従属して生ずるものとして重要なのであつて、それ自体を独立にとりあげないとしている（七四—八四頁）。

しかし第三の原因は重要である。それは商品の供給方法の変化である（八四頁）。シュンペーターはこれによつて新商品の導入・既存商品の生産技術の変化・新市場の開發・新供給源の開發・新事業組織の設立等を意味している。これが革新といわれるものであつて、經濟の發展をもたらすべき独立最重要の内生的原因となるものである³⁾。

三 この革新は生産函數の概念を用いてより一層厳密に定義すれば、新しい生産函數を設定すること、ということになる（八四頁）。そこには當然非連続的な変化が生じているわけである。

四 革新の概念とともに企業と企業者についてのシュンペーター独自の概念が生じる。「革新を遂行することよりなる活動に對して我々は企業なる言葉を保留し、それを遂行する個人を我々は企業者と呼ぶ」（一〇二頁）のである。そして革新を行わないで旧來の方法をそのまま行ふ事業主体は「單なる業主」（一

〇二頁）と呼ぶのである。そして勿論企業者が革新を行う動機は利潤である⁶⁾。

五 ところで新しいことを最初にするというのは困難な事である。第一に環境が反抗するであらうし、第二に新しいことのための前提條件が欠けているであらうし、第三にたいいの人々が新しいものに進むことに抑制感を持つであらう。これらの事を乗り切つて始めて革新は実行され得る。しかし一度び新しいことが成功するならば、それは困難の程度を減じて最初には少數のそして後には益々多數の模倣者が輩出することになる（一〇〇頁）。「開拓者に続く人々は、連続的に零にまで減少してゆく程度にはあるが、やはり企業者なのである」（四一四頁）。新しい事が當り前の事になるまでは兎に角やはり企業者である。このように企業者が集団的に群生して出現することは後に重要な意味を持つことになる⁷⁾。

六 革新に関連して重要なことは成功した企業者が入手する利潤である。利潤は革新に成功した企業者に与えられる職能收入であつて、新しい事が當り前の事になってしまえば消滅する一時的なものであり、この点では所得ではないのである（一〇六頁）。

(1) シュンペーターは革新を新生産函數の設定と考える。ところで、新市場の開發や新供給源の開發は果して古い生産函數を破壊し新しいそれを設定するものであるうか。成程、

新市場や新供給源の開発を媒介として生産技術の変化が生ずることはあり得る。しかし単に販売高や生産要素の供給が増加するということもあり得る。後者の場合には、これは必ずしも新生産函数の設定と結びつくものではないと考えられる。(このことの認識は中山大氏の示教に負うところが大きい。記して感謝する)。

- (2) 尚、この革新の概念の内容については次を参照することが重要である。Schumpeter, *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, 1912, 5. Aufl., 1952, SS. 100-101. 中山・東畑訳「経済発展の理論」昭和十二年、六六―六七頁。Schumpeter, *Capitalism, Socialism and Democracy*, 1942, 3rd Ed., 1950, p. 68. 中山・東畑訳「資本主義・社会主義・民主主義」(上)昭和二十六年、一一一頁。

尚、この革新は生産要素の結合の新しい選択行為であり最も純経済的なものであると中山教授は主張される。中山伊知郎「ヨーゼフ・シュムペーター」季刊理論経済等一九五〇年一月号。

- (3) A 革新乃至新結合の遂行は生産力の増進に該当するという認識は重要である。岸本誠二郎「価格の理論」昭和十七年、一〇八頁・四六〇頁。「新訂経済学原理」昭和二十八年、一九四頁。

B 発明・発見等にもとづく革新を random factor とす

シュンペーターの景気変動理論

るバーンズとミッチェルの考え方はこのシュンペーターの考え方と対照的である。Burns and Mitchell, *Measuring Business Cycles*, 1946, p. 466.

又「サミュエルソン・ヤンセン等も革新を外生的なものとみなす」例えば Samuelson, *Economics*, 1948, 2nd Ed., 1951, p. 368. Hansen, *Economic Progress and Declining Population Growth*, 1958, *Readings in Business Cycle Theory* ed. by a Committee of American Economic Association, 1950, p. 371.

又、景気変動は革新なしに説明し、成長を分析する時に始めて革新を考慮するという考え方もシュンペーターの考え方と根本的に異なる。例えば、森嶋通夫「資本主義経済の変動理論」昭和三〇年、第六章。

- (4) この点についてはラングがいくらか掘り下げた研究をしてゐる。Lang, A Note on Innovation, *The Review of Economic Statistics*, Feb., 1943.

- (5) アチンスタインによれば「この企業者が所謂 captain of industry である」Achnstein, *Introduction to Business Cycles*, 1950, p. 459.

- (6) 資本主義的生産の世界においてはこの利潤動機への認識は当然である。しかし彼には更に突っ込んだ議論がある。それは彼が「経済的社会学的分析」(一〇三頁)と呼んだもの

のであって、彼の「経済発展の理論」において示されたものである。Schumpeter, *Theorie*, 5. Aufl., 1952, SS. 137, 138, 139. 邦訳三三九頁、三三〇—三三二頁。そこでの彼の議論は決して純粹経済学的ではない。むしろ社会学的であることは彼の云うところである。ここに企業者の二重性格が論ぜらるべき深奥の根拠がある。

後にみるようにシュンペーターにおいてこの企業者の革新活動が発生するのは均衡の近傍である。しかしここには問題がある。企業者活動の動機を利潤追求にありとするならば、均衡の近傍にその発生を限る必要はない。不況を乗り切り利潤を回復するために企業者が革新を行うことは十分考えられることである。歴史的分析の所ではシュンペーターもこの事を指摘するが、しかし理論展開の場合にはこれを無視している。(不況下での革新への傾向については、例えば、Etsey, *Business Cycles*, 2nd Ed., 1956, pp. 100, 149; Haberler, *Prosperity and Depression*, 3rd Ed., 1946, p. 394 n., Samuelson, *Economics*, 2nd Ed., 1951, p. 247.)

(7) 革新は時間的に一様にスムースに出現するものではない。それは集団的に群生し、いわば非連続的な衝撃性を持つものである。このことの認識こそ、シュンペーターが自らの新しき貢献としてゐるものである。Schumpeter, *Die*

Wellenbewegung des Wirtschaftslebens, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 39. Band, 1915.

S. 8.

5 発展を媒介する機構

一 発展の動因は発展を媒介する資本主義的機構を通して作用する。この機構を説明するのがシュンペーター・モデルの貨幣的側面である(一〇九頁)。この説明を展開するに当って彼は三つの前提を設ける。第一に企業者は必要とするもので(資本)を全部借入する事。第二に企業者以外は誰も借入しない事。第三にこのもとでは創造された支払手段よりなる事、である(一一〇—一一一頁)。

二 従って企業者は信用創造を受けることによって購買力(資本)を得、それによって生産要素を手しそれを革新のための新しい用途に利用することになる。この時インフレによる所謂強制貯蓄の現象があらわれていることは云うまでもない。この信用創造を行うのが銀行なのである。このように信用創造は「革新の貨幣的補完物、である(一一一—一二頁)。

三 信用創造は銀行より企業者に与えられ、企業者はこれに対して利子を支払わねばならない。これは資本主義制度のしからしめるところである。而して利子は利潤より支払われるのであるから革新こそ利子の支柱であり源泉であるということになる(一二四頁)。そして利子は貨幣資本の交換、ここでは信用授

受によって成立するものであるから、利子は全く貨幣的な現象であるということになる(一二五頁)。

四 信用創造の行われる貨幣市場の重要は以上によって明らかである。シュンペーターはこれを資本主義組織の心臓であると云っている(一二七頁)。

(1) この点に關しては岸本教授の批判は注目すべきである。

岸本誠二郎「分配の理論」昭和八年、一九八頁。

(2) A 因みにストルバーによれば、「貨幣理論と均衡理論と景気変動理論の統合は、シュンペーター教授の理論構成の大なる魅力の基礎である」W. F. Stolper, Monetary, Equilibrium and Business Cycle Theory, *The Review of Economic Statistics*, Feb, 1943, p. 91.

B 利潤は一時的なものであるが利子は常に存在する。何故か。シュンペーターは次のように答える「貸手は、機

会の一つ一つが出現するにつれて、貨幣を機会から機会へとシフトさせることによって永続的な収入を依然として確保するであらう」(一二五頁)と。

6 経済発展と景気変動

一 資本主義的革新が資本主義の貨幣的機構を通して資本主義経済発展を生み出してゆくのであるが、この発展は必然的に景気変動の現象を伴わざるを得ない。この展開は次のように三つの段階にわたって行われる。

二 まず第一次接近として単一波動二局面図式の展開がなされる。これは彼の純粹モデルであり(一三八頁)、ここで描かれる波は第一次波動である(一四五頁)。

この接近ではまず次の事が前提される。即ち「現実において非常に重要な一定の要素、特に診断と予測における誤りとその他のミスデイクという要素が存在しない」(一三〇頁)ということである。

そこでまず定常状態を想起しよう。そしてそこに企業者の革新活動を導入しよう。勿論そこでは信用創造を媒介としてインフレを通して生産要素の転用が企業者によって行われる。新生産函数が設定されるのである。前述の論理に従ってこの革新は集団的に群生する。そしてそれは経済の広大な領域にわたって波及してゆく。これは定常状態の破壊であり、経済諸量の数値は均衡値より乖離してゆかざるを得ない。信用創造によるインフレのために要素価格は上昇して利率も信用需要の結果上昇する。勿論経済全体としての貨幣所得は増大する。これに反して生産要素の転用の結果一時的には消費財生産は減少し生産財生産は増大することになるであらう。革新を行わなない古い事業体は自己が最もよく適応していた定常状態が破壊されたのであるから変動にさらされるのも止むを得ない。不均衡過程の進行によって損失を蒙るものも勿論あるが、しかし偶然の利得に恵まれるものもある。

やがて革新の効果が表面化することになる。新設備が動き始めて新消費財が流れ出す。全体として消費財は以前にもまして増大するであらう。成功した企業は利潤を得る。新財貨の産出速度は益々早くなる。この過程がいよいよ急速に進むにつれて表面化した不均衡が経済に向つて新しき事態に対して適応することを要請し始める(一三四頁)。この間にあつて、旧事業体には革新によつて生じた新しい経済領域に進入してゆくものもある。又近代化・合理化によつて残存するものや、それが出来ず死滅するものもある。これらが生じることが実は経済発展の重要な面である。このような点は生産指数のみを取扱つていては明らかにすることは出来ないが、その重要性を忘却してはならない(一三四頁)。

しかし新企業が出現している限り、即ち革新が進行している限り、経済過程の方向転換はやつて来ない。転換が生じるのは革新が止まるからである。では何故に革新は止まるのであるか。理由は二つある。第一に革新の効果がますます急速に出現し、新財貨がますます急速に増大してゆくならば、その価格は低落の傾向を持つ。このことはやがて売上高を費川と等しからしめる傾向を持つ。第一次接近の前提によつてこのことは正確に予測される。利潤は消滅の傾向にあることが予測される。かくして革新への動機も消滅せざるを得ない。第二に価格の不均衡的変動のはげしさは企業者の収支計算を不能ならしめるであらう。

ここにも革新の消滅を促す事情がある。このようにして革新は消滅し、経済体系は転換するのである(一三五—一三六頁)。過程は更に進行する。企業はやがて銀行に対する返済を始めるであらう。これは価格の低下を更に促進する。デフレが始まる。しかしこれは銀行側の事情とは無関係に自動的生ずることである。シュンペーターはこれを自動的デフレーションと呼んだ(一三六頁)。

適応が要請されている。しかも第一次接近の前提によつて予測は正確になされる。均衡化のメカニズムが作用し始める。経済は新しい均衡の近傍へと接近してゆく。定常状態の均衡体系から出発した経済は再び新しい均衡へと接近して来たのである。しかし勿論古い均衡と新しい均衡とはその様相が異なる。生産物の内容は異なり生産函数も異なっている。又貨幣所得の総額は以前の定常状態と等しく利率は最低(厳密には零)となり利潤や貸付も零となつていても、価格体系は異なっており、より低い価格水準となつてゐるであらう(一三七頁)。時系列上でこのような均衡の近傍にあると考えられる時点を結べばそこに一つの趨勢が描かれるであらう。これこそ発展と景気変動が結果として残して行つた資本主義経済の趨勢に外ならない。これをシュンペーターは結果趨勢と名付けてゐる(二〇六頁)。

第一次接近の図式は以上の通りである。経済過程は二つの局面に分割されている。第一は均衡から離れてゆく過程であり

「繁栄」と呼ばれる。その過程の推進力は革新である。第二は新しい均衡へ接近してゆこうとする過程であり「後退」と呼ばれる。これは繁栄に対する反動の過程である。その推進力は革新によって作り出された新しい情勢に経済が受動的に適應してゆこうという均衡化のメカニズムである。そして均衡から始まり均衡に終る過程が一つの波動の単位をなすのである（一三八—一二九頁）。

三 次に第二次接近がなされる。ここでは局面は四つになり単一波動局面図式となる。そしてこの図式では第一次波動に並んで、或はそれよりも遙かに圧倒的な外観をもって第二次波動が波打ってくる（一四五頁）。

それでは二局面を四局面にかえるものは何か。第一次接近において取り除かれてあり第二次接近において導入されてくるところの要素がそれである。投機の要素が導入されるのである（一四五頁）。投機はそれなき場合の繁栄にもまして早期且つ急速にブームをスタートさせるであらう。今や信用の授与は企業者のみに限られない。価格上昇は更に価格上昇をよびおこす（一四五頁）。この状況が第二次波動をつくり出すのである。この波動の中にあつては、景気変動過程において集中的にあらわれる誤謬、即ち樂觀論や悲觀論の行き過ぎもあらわれる（一四六頁）。およそこれらの事は第一次接近の前提からしては生じない第二次接近に特有のものである。

さて、第二次接近のモデルを定常状態から出発せよう。企業者が革新を持ち込む。信用創造が行われる。しかしこの場合の信用創造は革新に限られない。当然に不生産的なものへの貸付も生じてくる（一四七頁）。このことによつて投機は負債を増大さす破局をもたらす価格低下の要因となることは屢々である。しかし兎に角企業者の革新によつて生産要素は転用されるし、模倣者・資格の乏しい企業者の出現によつて革新は集団的に群生する。革新はやがて全経済に波及してゆく。この過程の進行は第一次接近の繁栄に比して遙かに華々しい。これをシェンペーターは第二次の繁栄とよんでいる（一四八頁）。

しかしこの繁栄はやがて崩れる。第一次接近のモデルの根本的作用は勿論ここでも働いている。革新は消滅する。經濟過程は転換する。新しい事態に対し經濟は適應しなければならぬ。不均衡の要素は「整理」され除去されなければならない（一四八頁）。このようにして後退の過程が展開して經濟は新しい均衡に接近しようとする。

しかし第二次接近のモデルに導入せられた要素は經濟の円滑なる均衡接近を許容しない。投機の要素が繁栄とは逆の方向に働き過度の悲觀論が流行する。これは必ずしも恐慌をひきおこすとは限らない（一四八頁）。しかし価格低下は価格低下を生み、借手が借入金返済せんとし銀行が流動性を改善しようとする努力は、借手を行きづまらせる。のみならず人々はヒステ

リツクな状況にまでなってくる。経済は悪循環にまき込まれるのである(一四八頁)。接近さるべき均衡の近傍は何時のまにか通りすぎてしまう。その整理の過程は過度に進行し、「異常整理」の新しい局面に入り込む(一四九頁)。この局面がシュンペーターの云う「不況」である(一四九頁)。

不況の過程が進行し始めると問題になるのは回復の過程は如何にして生ずるかということである。この回復点の問題は悪循環過程を生ぜしめる四局面図式に特有の問題であつて二局面図式には存在しない(一五一頁)。ところでこの問題はなかなかむずかしい問題である。何故なら価格低下が価格低下を生み、生産低下が生産低下を生むような悪循環はそれ自身の作用で自己を再生産してゆくからである。この不況の過程は果して停止するであらうか。「この問題に対しては、一般的解答は存在しない」(一五三頁)とシュンペーターは云う。しかし不況を停止せしめるような事情もないことはないとして彼は次の事情をあげている。第一に悪循環の効果は次第に拡散され稀釈になってゆく面がある。成程破産は破産を生み市場の崩壊は市場の崩壊を生むであらう。しかしそれ等の一つ一つはその作用をばらまきにつれて弱まってゆく面を持っている。或事業の破産は他の事業の破産を生むであらうが破産しないで耐えてゆくものもある。失業は失業を生むが、その増大率は減少するであらう。産出高の減少は産出高の減少を生むであらうが、その力は弱ま

ってゆくであらう。これは悪循環を消滅せしめる一つの事情である(一五三頁)。第二に不況時に反って有利となる事業がある。悪循環は均衡を通り越してそこから離れる運動であり、価格は分裂し、物的諸量は均衡関係からますます乖離してゆく。そしてここにしからざる場合には生じなかつたであらう相対的に有利なる機会・利得の可能性が生じ、この可能性が実行に移されるであらう。これは悪循環の進行を喰ひ止める一つの事情として作用するであらう(一五三―一五四頁)。これら二つの事情は回復的作用を持つであらうが、しかし悪循環を打ち消す程に強力なるものであるという保証はない。議論の一般性を保持しようとする限り回復の必然性は論証出来ないままに残されることになる。回復が生ずるためには政府の活動か何か有利な偶然が必要であるというような公衆の意見の中には、かかる真理の要素があるようにみえる(一五四頁)。しかし上記の事情によつて不況が止まれば、これが下位転換点であり、経済が新しい均衡の近傍へと向う第四の「回復」局面が展開することになるのである(一四九頁)。⁴⁾

回復の第四局面は新たな均衡の近傍への過程である。しかしやがてこの均衡の近傍が到達されても、それは体系が最初に出發してきた定常状態たる均衡とは異なつた様相を示すであらうことは第一次接近のモデルと同じである。しかし兎に角、均衡から出發して均衡に至ることによつて景気変動は一つの単位

過程を完了する。時系列上でこの均衡の近傍を結んでゆく時に、四局面の景気変動を示しながら進んでゆく資本主義経済発展の趨勢が描かれる。これをシュンペーターは結果趨勢と呼ぶ（二〇六頁）。

四 ここまでは景気変動の波は一種類であると考えられてきた。シュンペーターの「経済発展の理論」ではこの単一波動図式を提示するのみで終っている。しかし「景気変動論」ではこの点に反省が加えられ図式は一段と複雑化される。その結果描かれるのが三波動図式である。

それでは三波動図式の波動はどのようなものであるか。それは周知の通り第一にコンドラチエフの波動であり、第二にジュグラの波動であり、第三にキチンの波動である。ただししかしキチンの波動は革新によって直接にひきおこされたものであるか否かは確定的でなく、単なる受動的変動であるかもしれないとしている。（一七〇—一七一頁）。

更に彼はより長期の波動はより短期の波動に対して趨勢と均衡を提供するものであるとしている。そして完全な均衡は三つの波がすべて均衡値をとった時にのみ生ずるものであるけれども、長い波は短い波に対して長期条件を与えるのであるから、これを短い波に対する趨勢と考え、この事を手がかりとしてこれを短い波の均衡乃至均衡の近傍と考えているのである。これと並行して革新も又完全な均衡のみから生ずるのではなく、こ

こで新しく考えられた均衡の近傍からも生ずることになる。これはシュンペーターが単一波動図式より三波動図式に移行するにあたって行った重大なる修正である（一七三頁）。

こうして得られた三つの波動はそれぞれ二局面乃至四局面を生むのである（一七二頁）から、彼の図式は、第一次波動のみを考える時には三波動二局面の図式であり、第二次波動をも考慮すれば三波動四局面図式となる。

- (1) このようにして彼の経済発展と景気変動の図式は完結する。このようにして彼の経済過程の方向転換にあたっては革新的生産活動の結果の出現が重要な意味をもつ。別の面よりみると生産期間が重要な役割を持つのである。この点では他の多くの論者と共通してゐる。例えば、Hicks, *Value and Capital*, 1938, Chaps. 23 and 24. 安井・熊谷訳「価値と資本」Ⅱ、昭和二十六年、第二三—二四頁。Aftalion, *The Theory of Economic Cycles Based on the Capitalistic Technique of Production*, 1927, *Readings in Business Cycles and National Income* ed. by Hansen and Cleinence, p. 130. 又、リストによれば「ついでシュンペーターの考えとマフタリオンの考えは一致する」(Gide and Rist, *A History of Economic Doctrines*, English Translation, p. 719.
- (2) この点に關して中谷教授は次のように云われる。「シタ

ンペーターの景気理論は、貨幣的景気理論といい難いが、それでも……【信用貨幣的要素の——引用者】変動振巾の増大作用を認めている」と。中谷実「信用貨幣と統制」経済論叢、昭和二十九年五月号、一二頁註。

- (3) 悲観・楽観の心理的要因を強調する論者(例えば、Pigou, *A Synthetic View*, 1920, *Readings in Business Cycles and National Income*)に対して、シュンペーターはこれを第二次的な要因とする。ここにも革新を第一義的に重要視する彼の真面目がある。彼にあっては、このような心理的要因はなくても、景気は変動するのである。

- (4) ここでもし、外生的に所謂基礎的消費と云われるものを持つてれば下位転換点の証明は容易になる。(例えば、森嶋通夫「資本主義経済の変動理論」二〇九頁以下)。しかしシュンペーターはかかる外生的要因なしに推論を進めているのである。

- (5) 因みにシュンペーターはフェルナーへの私信で第四回のコンドラチエフ波動の開始を一九五三年に予想していた、とフェルナーは報じている。Fellner, *Trends and Cycles in Economic Activity*, 1956, p. 47.

- (6) このキチンの波動が単なる受動的なものであれば、シュンペーターの理論構成の中では景気変動の基本的部分ではなくなる。ところで後になってシュンペーターは、受動的

な在庫変動の波動がキチンの波動であることを主張するメツラーの主張に同意するに至つてゐる。J. Metzler, *Business Cycles and Modern Theory of Employment*, 1946, *Readings in Business Cycles and National Income*, p. 291. Schumpeter, *The Historical Approach to the Analysis of Business Cycles*, 1949, *Essays of J. A. Schumpeter*, p. 314. かへして結果としては、シュンペーターの図式はコンドラチエフの波動とシュタラーの波動とよりなる二波動図式であるといえる。

- (7) 景気変動の問題に関連して、シュンペーターは他の論文で、資本主義の安定性について注目すべき議論をしている。Schumpeter, *The Instability of Capitalism*, 1928, *Essays of J. A. Schumpeter*, 1951.

7 その他の経済変動

一 勿論以上の図式がすべての経済変動を尽くすものではない。シュンペーターは以上の図式に含まれない経済変動を「その他の経済変動」として考察している。

まずシュンペーターは外生的要因による変動をとりあげるが、我々はこれを省略する。

二 元来主要な経済変動は物理学的な類推には適さないものである。しかし種々の経済変動の中に物理学的類推を許すものが全然ないわけではない。彈力的波動のモデルに非常によく適

合するような変動も存在するのである。しかしこれは適応波動乃至は振動であつて景気変動にとつて重要なものではない。(一八三頁)。

三 更にシュンペーターは巨視的動学の描く波も「その他の経済変動」の中で考察し、その意義と限界を詳論する。その実例として彼は一九三五年のカレッキーの理論をとりあげその要約を行い、つづいて次のように論じている。カレッキーの巨視的動学の描く波動は経済発展の強力な波動を何等説明するものではない。カレッキーはもう一つのあり得べき適応の波動乃至は景気変動内部での波状性を予想すべきもう一つの理由を明らかにしたにすぎないのである、と(一八八頁)。又一九三一年のティンバーゲンや一九三三年のフリッシュのモデルも景気変動理論ではなく、メカニズムの一断片を示すものにすぎないのである(一八八—九頁)。

四 その他の経済変動としては更に設備の置換と結びついて生じる波動がある。旧設備の置換が一時期に集中すれば勿論大きな変動が生じる。しかしこれは経済発展の強力な波動を説明する力は持たない。設備の耐用年数は設備の異なるによつて異なり、又企業によつてもその利用年数は異なる。設備の需要の集中がおれば設備の価格も上昇し、設備市場での均衡化作用も働くであらう。従つて設備の置換の集中をもつて景気変動の主要原因とすることは出来ない(一八九—一九二頁)。

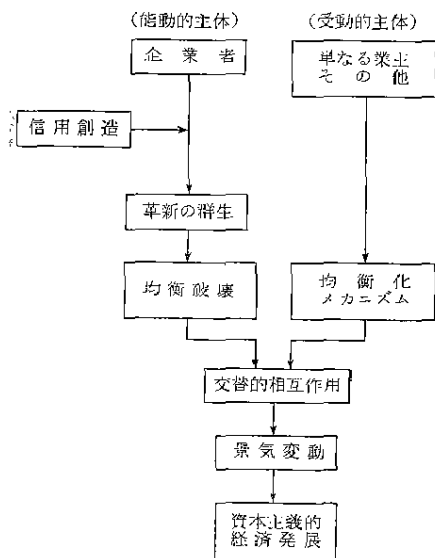
- (1) このようなものの一例としては所謂「くもの巣」の問題がある、とシュンペーターは云う(一八三—四頁)。
 - (2) これについては青山教授の紹介がある。青山秀夫「経済変動理論の研究」第一巻、昭和二十四年、八五—一〇四頁。
 - (3) フリッシュの理論については青山教授の紹介がある。青山秀夫「経済変動理論の研究」第一巻、七三—八四頁。
 - (4) 同じ趣旨の事をシュンペーターは次にも述べている。Schumpeter, Preface to the Japanese Edition, 1937, of *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*. 中山・東畑訳五—六頁。
- 晩年においてもこの考え方は変わらず、リムネルソン流の巨視的動学に対しても同様の評価をしている。Schumpeter, *History of Economic Analysis*, 1954, pp. 1160-1169.

三 シュンペーター理論の基本的特徴

一 以上論じて来たシュンペーター理論の最も重要な基本的特徴は、シュンペーターが抱いている雄大な構想乃至その視野である。彼は資本主義過程そのものを分析しようとし理論的・統計的・歴史的分析を展開し、景気変動理論はその中の一環として位置づけられる。単に、価格の動きをみようというだけでもなければ、又単に産出高や投資量の動きを見ようというのでも

ない。資本主義の変動過程そのものを、その動因にまでさかのぼり、それが資本主義の制度的機構を通して波動と発展が如何に不離一体となりつつ現象してくるかを把握しようとしたのである。彼の景気変動理論はこの事の理論的把握に外ならない。このようにして得られた最終的結論は、景気変動は経済発展の資本主義的形態として認識されるということである。これほど

シュンペーターの理論構造



の視野を持つ理論家は稀有である。

二 彼が人間行為に二つの型を区別したことは格別の重要性を持っている。受動的な行為は経済的適応過程即ち均衡化メカニズムの基礎である。能動的行為は経済発展の動因であり、その具体的表現が企業者の革新活動であり、この革新の集団的群生が均衡破壊の作用の基礎をなすのである。そしてこの二つの行為類型に基礎をおく二つの要素（即ち均衡化メカニズムと均衡破壊作用の二つの要素）の交替的相互作用によって景気変動が生じ、それを通して資本主義的経済発展が進行するのである。この場合信用創造にまつわる貨幣的機構が企業者の革新活動を側面より支えているのである。シュンペーターのこのような理論構造を縮約的に図示すれば上図のようになる。

三 以上二つの事は、景気学説史上のみでなく資本主義分析史上シュンペーターに特異の地位を与えるものと思われる。

- (1) 又、シュンペーターは「経済生活の波動は「社会的発展の全く一般的な形態の特殊経済的表現」であると云ってゐる」 Schumpeter, Die Wollenbewegung, Archiv, 39. Band, 1915, S. 32.
- (2) この点については次の文献が重要である。 Schumpeter, Theoretical Problems of Economic Growth, 1947, Essays of J. A. Schumpeter; The Creative Response in Economic History, 1947, Essays of J. A. Schumpeter.

- (3) レオンチュフの云うように「シュンペーターは……技術的経済学の限界を遙かに踏み越えて行った」のである。W. Leontief, Joseph A. Schumpeter (1883-1950), *Economica*, April 1950, p. 108.

四 結

一 以下我々はシュンペーター理論の体系的・理解に努力して来た。そして今やその基本的特徴を把握したと考える。しかし我々の前には多くの問題が山積している。

例えば、現在我々の前には景気変動を分析せんとする多くの理論が並んでいる。それ等はシュンペーター理論と比較する時、どのような機相を呈するか。この事については多くの人々が既

に屢々論じてきたが、我々も又多くの主張を持っている。

更に、シュンペーターの社会科学体系の中での景気分析の位置づけも明らかにしなければならない。

それだけではない。彼の景気分析は我々の現実の解明にどれだけの分析力をふるうであらうか。

我々は機会を得て逐次これ等の問題を論じ、更にはシュンペーターを乗り越えて進み、分析を深め分析を拡大し、資本主義経済の全体的理解の方向に研究を進めてゆきたい。

(この論文は昭和三五年一月に提出した修士論文の前半を母体にして出来上ったものである。)

(一九六〇年八月一〇日)